

詩編 第19編 1節

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」

長く続いた雨、特に列島南西部では豪雨による災害が各地から報じられた。ようやく雨は止み、残暑が厳しい日となる。油断はできない。また、雨が降り注ぐときがくる。気候は変わるように、人々の生活環境も変わる。特に感染症がかなりのスピードで蔓延している現状では、日ごとに報じられる数値に目を凝らす。

それでも、今日の歌が聞こえる。天は神の栄光を、大空は御手のわざを。地上にあえぐ者には縁遠い歌のようである。しかし、聞くべき歌とも聞こえる。地が荒れ狂おうとも、天気が変わろうとも、生活環境が変わろうとも、変わらないことがある。変わりゆく世界にあって、変わらない歌を聞く。聞こえてくる耳を与えられている。変わりゆく地にあって、変わらない歌を歌った先人達の喜びを今日共に味わう幸いがある。

天が告げる。大空が告げる。それは、天地万物を創造し、支え、完成へと導かれるお方がいるから、歌い手は告げ、告げ知らせる、と歌う。天と大空の背後におられる創造主を聞く者には、このような歌が生まれる。たとえ、地に荒れ狂う事象が尽きなくても。